

114
A3825



三号覺書

啓上仕候然者兼テ差出置候第十六十七

号覺書并ニ第二十号覺書ノ儀ニ付キ「シヨーン

ス」氏ヨリ別紙下野常陸下総等ノ諸州ニ有之候

荒地報告書差越申候間則閣下ニ謹呈仕候尤モ

右別紙ノ中ニ「ハ」シヨーンス」氏総体裨益ノ事柄

ヲモ論申候間左様思召可被下候謹言

千八百七十五年

一月二十三日東京ニテ

大正十一年四月
大隈侯爵郵寄贈



千ヤーレス、ウ、レゼンドル

大藏卿

大隈重信閣下

第三号

是レ迄相模、駿河、伊豆、甲斐等諸州ノ荒地ニ付キ
 余カ差出セシ報告書ニ續キテ余更ニ下野常陸、
 下総等諸州ニ在ル荒地ニ付キ右報告書ニ記ス
 ル所ト同様ノ事柄ヲ左ニ上申セントス
 湯本ハ下野州ノ北西ノ隅那須山脈ノ麓ニ於テ
 海面上二千「フ」ト許ノ処ニ在リ右那須山脈ハ
 下野州ト會津州トノ分界ヲ為シ日光山脈ト相
 連接ス、備又日光山脈ノ一山嘴ハ利根川谷ノ短
 キ切レ目ノ外右那須山脈ヲ築波山脈及ヒ其山

嘴ト接合セシメ又東ニ於テハ水戸ト下野ノ分
界線タル築波山脈ノ一山嘴アリテ此立チ場所
ヨリ遙カニ遠景ヲ望ムノ妨害ヲ為セリ
右山脈ノ分界以内ニ低キ圓形ノ小山脈アリテ
下野水戸常陸ノ三州ヲ分テ古昔海水ノ退キタ
ル數多ノ圓谷ト為ス蓋シ此圓谷ハ昔シ皆海ノ
入江タリシニ疑ナク而シテ江戸ノ海灣及ヒ大海
ノ沿岸ヨリ最モ離隔セシ此等ノ圓谷ニ於ケル
泥土ノ総体ニ深キヲ以テ見ル時ハ海水ノ嘗テ
漸々ニ其圓谷ヲ退キタルヲ知ル可シ

其泥土ノ質ハ水ノ集堆セシメシ沙石上ニ在ル
黒色ノ植物質肥土ニシテ昔シ其入江ノ水ハ海
ニ出テ尽クスヨリ數百年以前ニ其周圍ノ山脈
及ヒ丘陵上ニ泥土ノ堆積シ而シテ其泥土ノ次
弟ニ右入江中ニ流レ出テタルニ因リ其後水ノ
此処ヲ退クニ至テ艸木速カニ繁茂シ其屢ニ生長
シテ又屢ニ枯腐シタルニ因リ嘗テ昔シ無用ノ入
江タリシ処ニ於テ方今ハ結構ナル黒色ノ植物
質肥土アルニ至レリ

湯本ヨリ余ハ那須ノ原ト名クル有名ノ荒地ヲ

稍点檢セシニ湯本ト横澤トノ間ノ荒地アリテ
此処ハ各種ノ獸類ヲ牧畜スヘキ見事ナル牧地
ト為ス可シ蓋シ此地ハ二里四方アリテ夏ニ至
テハ那須山ノ如キモ小木ノ叢生スルヲナク艸
ノ繁茂スルニ因リ亦同シク獸類ヲ牧畜スルヲ
得可シ而シテ右ノ荒地ハ処々ニ樹木ノ散立シ
其中ニ小溪ノ之ヲ弯流スルアリ
儲其地ノ外面ハ浪立ツカ如キ形ヲ為シ泥土ハ
深クシテ耕耘ニ宜ク其処ニ在ル数箇ノ小
圃谷モ小キ高原モ之ヲ開墾スルヲ得可

シ儲又余ハ其処ヨリ大和地ト名クル長サ四
里廣サ二里ノ平地ヲ通過セシカ此見事ナ
ル地方ノ北ハ中川^{那珂}ニシテ其南ハ一帯ノ森林東
ハ奥州街道西ハ那須山ノ麓ニ在ル樹木植附場
ナリ
此ニ今^{大和地}ノ艸木ハ總テ那須ノ原ニ生スル
各種艸木ト其種類ヲ同ウシ其異ナル者ハ極メ
テ稀ナリ依テ今之ヲ掲クルニ其地ノ重ナル艸
類ハ日本ニテ「カヤバ」ト名クル者ト柴トノ二種
ニシテ就中柴ハ最モ多又処々ニ「シ」^シ「フ」^フ

スキユウ^名ウ^名 = 似タル^名 艸^名 リ^名 並^名 國^名 ノ^名 リ^名 ブ^名 グ^名 ラ^名 ッ

ス^名 艸^名 ノ^名 一^名 種^名 モ^名 其^名 中^名 ニ^名 雜^名 生^名 シ^名 又^名 毎^名 年^名 三^名 回^名 ヅ^名、 実^名

ヲ^名 結^名 フ^名 所^名 ノ^名 三^名 度^名 粟^名 ノ^名 小^名 樹^名 ア^名 リ^名 蓋^名 シ^名 此^名 小^名 樹^名 ノ^名 周^名

田^名 ハ^名 大^名 抵^名 一^名 「^名 イ^名 シ^名 チ^名」 ノ^名 四^名 分^名 三^名 ニ^名 過^名 キ^名 ス^名 其^名 高^名 サ^名 ハ

三^名 「^名 フ^名 ー^名 ト^名」 詩^名 ニ^名 シ^名 テ^名 一^名 株^名、 リ^名 三^名 本^名 乃^名 至^名 六^名 本^名 程^名 ノ

小^名 樹^名 ヲ^名 生^名 ス^名 ル^名 ナ^名 リ^名 又^名 此^名 地^名 方^名 ニ^名 ハ^名 処^名々^名、 白^名 色^名 橙^名

樹^名 ノ^名 小^名 ナ^名 ル^名 モ^名 ノ^名 ア^名 リ^名 ラ^名 其^名 中^名 至^名 大^名 ノ^名 者^名、 ト^名 雖^名 モ^名 周

田^名 三^名 「^名 イ^名 シ^名 チ^名」 ニ^名 過^名 キ^名 ス^名 又^名 此^名 原^名 ノ^名 西^名 部^名 ニ^名 ハ^名 相^名 應^名 ナ

ル^名 大^名 サ^名 ノ^名 「^名 パ^名 イ^名 シ^名」 樹^名 処^名々^名 ニ^名 散^名 立^名 セ^名 リ^名 蓋^名 シ^名 粟^名 ノ^名 樹

及^名 ヒ^名 橙^名 ノ^名 樹^名 ノ^名 生^名 長^名 シ^名 テ^名 大^名 木^名 ト^名 ナ^名 ラ^名 サ^名 ル^名 所^名 以^名 テ^名

此原ノ尔餘ノ原ト同シク毎年焼クルニ^稍管スル

ナラシ^リ乎何ニモセヨ此種類ノ樹木ハ至テ小ナ

余ハ右平原ノ中央ヲ流過セル三里許、長サテ

ル旧溝ニ添フテ進ミシカ蓋シ此溝ハ二百年前

ニ之ヲ穿クニ由ニテ其沿岸ニ七箇ノ村アリ

シニ之ヲ用ヒシハ唯僅カニ三年ニシテ當時其

堤防破レテ其持主モ亦死去シタレハ誰アツテ

之ヲ修覆スル者ナク右ノ村モ其地ノ耕耘モ共

ニ之ヲ棄テタリト云フガモ以前共ニ地ヲ耕耘

セシ痕跡ハ今ニ於テ判然タリ
右ノ地方ヨリ南ニ方テ西ノ原ト称スル原野アリ
此佳麗ナル原ハ長サ五里廣サ二里許ニシテ
其地質モ草木ノ種類モ^{大和地}原ニ同シク唯少
シク異ナル処ハ粟ノ小樹ノ間ニ榛樹ノ散立ス
ルヲ見ルノミ然ルニ此原ノ東部ニハ小樹ノ生
スルヲナク其東西兩部ノ間ニ二十丁乃至一里
ノ一帶ノ森林アリテ以テ其分界ヲ為シ其森林
中ニハ村落モ数ヶ処アリテ又岡壑セシ地モ之
レアリ

壑開セル土地ハ全ク尔餘ノ原ト同質ニシテ甚
タ豊饒ナリト思ハル蓋シ右ニ箇ノ地方ハ大
田原市中ノ南ト西トニ在リ而シテ又「^{大和}樹
及ヒ「^{大和}クリプトリメリ」樹ノ狭キ拉附地ニ因リ
「^{大和}ト隔離シ又奥州街道トモ離隔シテ「^{大和}メク
ツカノ原」此原ハ長サ二里廣サ三十丁アリ
テ其泥土ハ「^{大和}」ノ原ニ比スレハ稍低ク且ツ
小水ナキニ因リ其深サモ更ニ大ニ其質モ亦更
ニ良好ナリ而シテ此平原ノ東北ニハ中川^{那阿}アリ
南ニハ樹木ノ繁茂ニ^低丘陵^西ニハ奥

州街道アリテ此原ヲ少ノ離レ
ノ南ニ方リテ長サ二里廣サ五丁ノ豊饒ナル地
アリ○又大田原ヨリ黒羽ニ至ル途中奥澤村ノ
真北ニ長サ三里廣サ七丁ノ南カ子ハラト名ク
ル原アリ此原ノ南西部ニ一ノ小流アリ此小
流ハ街道ニ接シ奥澤村ニ近キ処ニテ一ノ湖中
ニ流出ス蓋シ此地ノ周囲ハ皆森林ナリ○其
川ニ赴ク途中黒羽ヨリ數丁ノ処ニ在ル「サヤ」ヨ
リ余「ナダ」ノ原ト云ヘル原ヲ通過セシカ此原ハ
長サ三里餘廣サ一里半許ナリ此原ノ中央ニ

キ所ニ幅ニ丁許ノ澤アリ又此澤ノ真北ニ餘オ
廣大ナル平原アリテ其平原ハ処々ニ浪立キ
ル形ヲ為スト雖モ總体ニ平坦ニシテ之ヲ壑間
スルヲ得可ク此処ニハ獸類ヲ牧スルニ十分
ル水アリ蓋シ此地ハ「サヤ」村ト「サビ」河トノ間ニ
在リ○「サビ」河ノ南岸ニ福原村アリテ其処ヨリ
「コ」ノ「ゴ」迄ノ路程ハ一里半ナリ蓋シ此ニケ処ノ
間ノ地ハ浪立キタル形ヲ為セモ開墾シ得可
場処モ又少ナラハ牧畜ニ用アル水モ亦十分
ナリ

「コノゴ」ニ於テ羨麗ナルニ
ラ六北ノ西ニ在
ル丘陵ハ低ク圓谷モ更ニ廣シ

西ノ原ヨリ東ニ方リ「ウエ」ノ原ト名クル平原アリテ其平原ハ東ヨリ西ニ擴マリ其長サ五里廣サ二里アリ其地面ハ全ク平坦ニシテ土地ハ豊饒ナリ

「キヌ」河ノ岸边ニ在ル阿久津ヨリ西ノ原ニ至ル迄ノ路程ハ八里許ニシテ「ウエ」ノ原ヲ過キリテ阿久津ニ赴ク路アリ此路ヲ名ケテ「ハラカ」路ト云フ但シ阿久津ハ西ノ原及ヒ「大和」ト水々

ノ往來ヲ為スヘキ最モ近キ場処ナリ○「ニシ」ノ原ハ「ウエ」ノ原ノ東ニ在リテ其長サ八里廣サ三十町アリ借此地ノ北西ノ部分ハ黒川ニ於テ阿久津ニ接シ其処ヨリ一年中何時ニテモ東京ト舟楫ヲ通スルヲ得可シ蓋シ此地首都ト船路ノ往來便アルカ故ニ地價頗ル貴シ○絹川ハ阿久津ヲ流過シタル後大抵此平原ト平行シテ流レ僅カ三十町許ノ一帶ノ森林アリテ其平原ト離隔ス又此所ヨリ遠カラズ長サ一里廣サ五町許ノ細ク一箇ノ原

アリ

「ウバカイ」ノ市中ヨリ直チニ東ニ方リ長サ一里
半廣サ二十丁許ノ高原アリ其土地ハ至極結構
ノ質ニシテ少シク閑墾スレハ多クノ産物
ヲ生ス可シ又此地方ニハ処々ニ散生セル蓋
薇樹ノ外樹木ナク唯雜草ノ繁茂スルノミ蓋シ
此原ノ名ハ「ウバカイ」ノ原ト云ヒ其東北部ニ小
キ沼澤ニケル処アリ○此原ヨリ北ニ方リテ半里
四方ノ原アリ総テ此等ノ原ハ朽木縣ノ管下ニ
在リ

筑波山ノ續キテ踰ヘテ椽木縣ヨリ新沼縣ニ入
リタルニ筑波山ノ西ト北西ノ面及ヒ常陸ノ西
部ニ延展スル此山ノ脉絡ハ總テ茅草小竹繁茂
シ牧牛ニ宜シク以テ許多ノ牛ヲ飼フニシ
土浦ヨリ一里半水戸街道ノ中ニ「ミギモミ」ノ原
ト云フ地ニ長サ十里幅一里ニシテ他處ノ原
ニ在ル者ト同種ノ草木地ヲ被ヘリ
荒川ニテ水戸街道ヲ離レ竟ケ崎ヘノ路ニ出
行ク一二里ニシテ女化原實ハ高ノ中ニ來ル此
原方一里ノ四分ノ三許アリ此原ニ接シ女化ト

称スル社ノ正北ニ一良地アリ地名亦女化ト云
ヒ其廣サ六千反許アリ

此地面ハ全ク芝モナシ此等ノ地ニハ縣廳ノ大
属ト同道セシナリ此地ト水路ノ最近キ入トカ
イガハヨリシテ田畝ヲ経テ通スル路アリ此路
ノ距里ハ一里半許モアルヘシ又トカイガハヨ
リ水戸街道ニ出ツルモ右ノ地ニ到ルヲ得レト
モ是レハ多ク千葉縣内ヲ通ス扱下總ノ舊牧場
曾テ政府ニテ拵下ニナサレシ頃ヤマガサハト
称シタル地ヲ経テ通行セシガ此邊ニハ別ニ記

スヘキ事ナレトモ此報告ヲ終フル前更ニ此野
ノ事ニ附キ説ヲ述ヘント欲ス此野ハ少クモ下
總ノ地ノ三分一アリ新治縣内不毛ノ地ト為ス
然レトモ上文ニ記スル處々ノ野ハ那須野ノ原
ト云フ原野ノ中ニシテ那須山ノ麓ニ初マリ椽
木縣新治千葉ノ縣々ヲ貫キ江戸海濱マテ達ス
ル者ニシテ唯材木ノ細ク帯ノ如ク列ルアリテ
此曠野ノ間ヲ區分スルノニ
西ノ原大和地及ヒ^ナツカ^ハ那須野ノ原ノ北
西ノ端ナリ

10

西ノ原 長サ五里幅二里

大和地 六里 二里

マクツカ 二里 三十町

此三處ノ坪数ハ三十五万一千二百反余ナリ今
少許ノ費用ニテ那珂川及ヒ其枝流ノ水ヲ此地
ニ引キ灌溉ノ用ニ充テ此曠野ヲ田ト為スヲ得
ヘシ

那珂川ノ上黒磯ト称スル地ニ於テマクツカノ
原ニ水ヲ灌クヘキ處アリ黒磯ヨリ此原ノ上端
マテ距離十五町ノミ又那珂川ノ水ヲ大和地マ

テ引クトキハ是レ亦マクツカニ灌ク一容易ナ

リ別行。扱石ノ灌溉堀割ノ總費用ハ之カ為ニ與ル利益ニ比スレハ極マテ僅
ニシテ此地ヲ熟知スル識者ノ積ル所ニテ五万帛許ナリト云ヘリ

且ツ之ニ加フルニ好キ街道開ケル一アリ人ニ
就テ議シ圖ニ據テ驗シ精査細訂シテ石ノ野ノ

廣袤ヲ算シタルニ百十二萬八千反餘ニシテ東
京ヨリ此野マテノ距離中教ヲ取テ算スレハ二

十里ニ出テス此廣大ノ地圍トニ天然ノ美ヲ以
テシ繞ラスニ一帯ノ樹林ヲ以テシテ其外ニハ

百工繁盛ナリ氣候モ好ク那須ノ高嶺冷ナル北
風及ヒ西北風ヲ屏障ス此寒風ハ年内四箇月ノ

//

間專ラ吹ク其餘ハ箇月ハ南東ノ風吹クナレト
モ何レノ方角ヨリ吹キテモ山或ハ森林ノ之ヲ
屏障スルニアリテ殊ニ牧蓄ノ為ニハ風ノ患ナ
シ
請フ閣下意ヲ此地ノ事ニ注カンテヲ那珂川及
ヒ其枝流ハ那須ノ野原ノ北西ノ部ヲ北西及ヒ
西方ニ向テ流レ緒川ハ西「ダイ」ノ原ト称スル原
ト阿久津ニテ相接スルヲ見
若シ專ラ稻ヲ作ラハ政府一反ニ付キ二弗五十
錢ノ年貢ヲ取り得ヘシ但シ此割合ハ固ヨリ慥

ナル處ヨリ聞ク者ナレトモ田租中數ノ算ニテ
ハ稍過高ナルヘシ然レトモ此割合ニテ三十五
萬一千二百反ノ年貢ヲ算スレハ年々ノ收納ハ
十七萬七千五百弗ノ大數ニ及フハ是レ獨米
ヲ作ル上ノミニテ生スル所ニシテ蓋シ米ノ外
何モ作ラサルトシテ直ニ政府ノ收納上ノ所得
ヲ生スヘキナリ
然ルニ今假ニ後來ノ事ヲ目算センニ右ノ地所
ヲ二分ニシ一半ニハ植ウルニ茶ト粟トヲ以テ
シ又一半ハ種々ノ雜用ニ供シ及ヒ牧蓄ヲ為ス

トセシニハ政府ノ収納必ス更ニ大ニシテ人民
ノ利益亦將ニ大ナラントス其茶及ヒ桑ヲ植ウ
ル所ノ地ニ就キ茶ノ方ハ十年ノ後一反ニ付キ
五十弗ノ利益ヲ生シ桑ノ方ハ四年ノ後利益ヲ
生シ初ムヘク余ヲ以テ考フレハ桑茶ノ二品ヨ
リ生スル利共ニ相同シカルヘシト為ス余ノ探
索シタル中慥ナルト思ハル、説ニ據ルニ茶ハ
此ニ記スルヨリモ其利稍多シト然レトモ右ノ
算ヲ為スニ余ハ其實ニ過キンヨリハ寧ロ不足
ニ積リタルナリ一反ニ付キ五十弗ハ必ス約マ

ル者トシテ見ルトキハ八百七十五萬五千五百
弗ノ大額ニシテ其産百ニ付キ十ノ税ヲ課スレ
ハ今日米ヲ作ル農ノ納ムルヨリ税モ輕フシテ
而シテ政府ノ収納ハ八十七萬五千五百弗ニ至
ルヘシ前ニモ記シタル如ク悉皆稻田ト為スト
キハ其租僅ニ二千弗余ノミ
他ノ一半ハ畑年貢今日ノ割合一反ニ付キ十四
セントヲ拂フトスヘシ此割合ニテハ其年貢ニ
万四千五百十四弗ト為ルヘシ又之ヲ雜税ニ為
ストキハ五十万十四弗ノ税ヲ得ヘク稻田ノ税

13

ニ勝ル一ニ万二千五百十四吊ナリ
右會計ノ損益ト政府收納ノ多少ヲ研究シタル
上ハ二種ノ耕夫ヲ驗查比較スル一第一ナリ然
ルニ異論ナク此議ヲ定ムル一ハ難カルヘシ蓋
シ日本ノ稲田ハ殆神靈ノ如ク諸人ノ貴重スル
者ニシテ近來マテ之ヲ議スル事ハ不敬ナル者
ト思做シ百價ヲ位スルノ標準ニシテ公私共切
勞ノ賞モ之ニ目テ其價ヲ量リ凡リ歲入皆米ノ
石數ヲ以テ計ルナリ日本ノ未タ外國ト通商セ
サルノ日ハ此穀ニ賴テ國ヲ立テタルナレトモ

之ヲ貴ミテ靈物ト為ス心ヲ用ヒテ之ヲ貯フト
雖モ凶歲饑饉ノ疾患國史ニ照々タリ
外國ト未タ通セサルノ日ニ他ノ穀類ト余計作
リ就中玉蜀黍ヲ作ル一ノ廣ク傳ハリタル一
ハ饑饉ノ疾患假令全ク除ク能ハサルモ大ニ之
ヲ減スル一アリタラン米ノ不存ナルニ當テモ
他ノ穀類能ク其不足ヲ補フヘシ蓋シ此等ノ穀
類ハ米ト成熟ノ時ヲ異ニシテ甚タ便宜ナリ日
本ニテハカヲ用ヒテ此等ノ穀類ヲ作ルノ地ヲ
称シテ薄貧ナリト為スナレトモ穀類ノ中米程

14

心ヲ用ヒカヲ盡シテ農夫ノ為ニ報賞少キ者ハ
ナシ故ニ日本ノ農夫ハ百中八十マテ貧ニシテ
餘ノ二十モ殷富ナラサルナリ然ルニ余米ヲ作
ル一ヲ止メヨト謂フニハ非サレトモ荒地ヲ闢
クニハ他ノ穀類及ヒ産物ヲ作り作得ノ多クシ
テ其勞ノ少キ者ヲ撰フニ如カスト為スノミ畑
ヲ耕スニハ馬ヲ使用スルヲ得^而シテ耕作ノ法
方ヲ一変スヘシ米ノ田ニハ人エヲ助クル仕方
ハ一モ之ヲ用ユル一能ハス他ノ穀物ヲ作ル一
夥多ナルトキハ之ヲ食用ニ充ツルモ甚ク廉價

ナルヘシ其廉價ナルニ回リテ大ニ米ノ代用ヲ
為スヘシ而シテ既ニ開墾セル地ヨリ税ヲ納メ
シメ又牧畜ノ業ヲ大ニ開キ是レヨリモ又税ヲ
納シタルトキハ新タニ財貨ノ源ヲ生シテ國ノ
歳入増加スルヲ以テ米作ノ農民ヲ救助スル一
ヲ得ベシ
然レトモ或ハ謂フ右ノ如ク他ノ穀物ヲ以テ米
ノ代用トナストキハ恐ラクハ餘分ノ米アリテ
代價下落スヘシト然レトモ余輩思フニ若シ果
シテ如此ナラハ米作ノ地ハ漸ク減シ而シテ他

ノ作物ハ得分多キヲ以テ米作ニ代ヘテ作ル者
アルヘシ且ツ方今政府ハ金税上納ノ法ヲ創メ
而シテ土地ニ何物作ルトモ聊カ之ニ管セス依テ
農民ハ己レノ利益ヲ計リテ其土地ヲ己レノ意
ノマニ用フルヲ得ヘシ但爰ニ言フヘキ事ア
リ他ノ穀物ヲ夥多作リトキニ何故ニ餘分ノ米
ヲ輸出セザルヤ

是レハ緊要ナル問題ニシテ急卒ニ論スヘカ
ス抑米穀ノ輸出ニ議論アルハ他ノ故ニアラス
之ヲ輸出スルトキハ其一分子モ其本地ニ復ル

トナクシテ終ニ地質既確トナル故ニシテ約
米ノミニアラス百穀皆然リ日本ニテハ従前穀
物ヲ輸出セサルニ由リテ農民ソノ地ノ肥沃ヲ
保存スルヲ得タリ然ルニ世界中支那ノ其部ヲ
取除ケテハ如此ノ例ナシ他國ハ其地質ノ既確
ナルニ由リ千八百四十年始メテ鳥糞ヲ用ヒテ
地ヲ豊饒ナラシメシヨリ以テ是レヲベリウヨ
リ諸國ニ輸入スル其金高凡ソ三億弗ナリト云
フ今日日本ノタメニ謀ルニ農業ノ外他ノ諸職業
ヲ営ミテ其餘リアルノ穀物ヲ輸出スルニ成ヘ

キ丈ケ其時限ヲ短ウシ其地質ノ肥沃ヲ保存ス
ルニ在リ然ルトキハ食物^廉價ニシテ製造ノ業
ヲ營ミテ甚タ利アリ茲ニ海關稅ノ報書ヲ閱ス
ルニ毛織ノ反物ノ條ニ日本ノ之ヲ輸入スル
年々凡ソ四百万弗ナリ然ルニ國中ニ在ル所ノ
美ナル牧羊場ハ捨テ顧ミズ又砂糖ヲ輸入スル
一八年々二百二十二万五千弗ナリ然ルニ甜^紅
蘿蔔ノ生長ニ適スルノ地數百頃アリト雖モ國
人之ニ手ヲ下タス^トナシ若シ一旦是等ノ地ヲ
耕ヤストキハ日本國中ノ用ニ供スルノ砂糖ヲ

製出スルヲ得ヘシ其他牛酪乾酪ノ如キモ其輸
入ノ價皆數千弗ナリ然ルニ豐盛ナル牧養場ハ
空シク其繁茂ノ草ノ凋衰スルヲ見ル^トニ其他
輸入ヲ待タスシテ自ラ製出スルヲ得ヘキモノ
種々コレアリト雖モ牧養スルニ違^アラズ前文
ニ據テ考フルニ米作ノ地漸ク減スレハ他ノ産
物ノ利益多ク且ツ必用ナルモノ漸ク興ルハ必
然ナリ予之ヲ聞テ凡ソ國ノ繁榮ハ職業ノ種類
ノ多キニ由ルト
上文ニ言ヘル如ク產物ノ種類多キハ繁榮ヲ

17

致ス所以ニシテ既ニ予ノ日本諸國旅行中日撃
スルニ製茶養蠶ヲ務ムル地方ニ於テハ其人民
美宅ニ居リ美服ヲ着シ歡樂ヲ極メテ米作ノ農
民ニ勝レリ而シテ其才智ニ至テモ貧富ノ差別
ト同シ

今是ニ種ノ人民ノ職業ノ相異ナル如ク比較セ
ンニ米作ノ農民ハ女子供ト雖モ地ヲ捏子肥糞
ヲ土ニ和シ踏均シテ苗ノ植付ケノ用意ヲ為ス
是レヲ為スニハ膝マテ泥濘ナル田ノ中ニ没ス
又植付ケヲナストキモ田ノ泥濘ナルトハ前ト

同シ又千辛万苦ノ後方サニ實ヲ刈取ルトキモ
多クハ水ヲ以テ地ヲ覆フトアリ是刈取リノ業
了ル後ハ之ヲ荷ヒテ夫々ノ場所ニ至リ穀物ト
蒿トヲ分カテ穀物ハ疊ニ載マテ之ヲ放^子下ス是
等ノ業皆了ル後ニハ之ヲ畜キ之ヲ簸ル等ノ諸
事ヲナシテ市場ニ出タシ或ハ食用ニ充ツルノ
用意ヲ為ス而シテ未年ニ至リ再ニ苗ヲ植付ケル
マテハ天ノ時ノ恵ミヲ受ケズ
人ノ職業ノ較愉快ナルモノニ向テ之ヲ見ルニ
此度ハ憐ミノ情ヲ起スヲナクシテ却テ少シク

羨ミノ情ヲ起スモノアリ此度見ル所ハ即チ田
ニアラス畑ニテ余輩モ寧ロ田ヲ去テ畑ニ就カ
ント思ヘリ夫レ地ヲシテ其實ヲ出サシメント
セハ之ヲ耕ヤスニ耕作ノ器械ヲ用ユヘシ鋤ヲ
用フヘカラス是器械ハ甚メ輕便ナレ甚メ有
功ナルモノニシテ一頭ノ馬コレヲ引キ一人コ
レヲ執テ馬ヲ引廻ストキハ壯健ノ男四人重キ
鋤ヲ以テナスヨリモ其功却テ多シ凡ソ一箇ノ
園ヲ設ケントスルニ先ツ為スヘキ事ハ桑茶植
付ケノタメニ地面ヲ用意シ而メ予カ今此ニ説

出ス農民ノ如キハ初メ茶ノ種ヲ蒔キ桑ノ切リ
枝ヲ地ニ挿スノ時ヨリ次第ニ富有トナレリ蓋
シ農民一タヒ手ヲ下ストキハ別ニ勞動スルコ
トナキモ天ノ時ノ恵ヲ蒙リテ毎朝次第ニ富有ト
ナル已レ夜ハ暗黒靜閑ノ中ニ眠ルト雖モ桑茶
ノ生長ハ晝夜止ムコトナシ又農民ハ茶ノ垣根ノ
間ニ少許ノ空地ヲ設ケテ馬ニ耕作ノ器械ヲ附
ケテ之ヲ引カシメ雜草ノ生長シテ桑茶ノ肥ヤ
シヲ奪フヲ防メ又粟小麥^{大麦}玉蜀黍ヲ作ルモ右ト
同法ニテ只其器械ノ跡ニ從ヒ馬ヲ指揮スルノ

又農民ハ狭キ園地アリテ牛一匹ヲ養テ乳ヲ
取り羊六匹ヲ養テ已レ其ニ家族ノタメニ食料
ト暖カナル服ヲ製ス右牛羊ノ如キ要用ナル動
物ヲ養フトキハ自然ニ肥糞ヲ得テ桑茶ニ限ラ
ス凡テ作物ハ皆之カタメニ善ク生長スヘシ
右様ノ園ヲ試ミ三箇年ヲ経テ今年ハ第四年ト
見做スヘシ然ルトキハ八反ニ植付ケタル桑ノ
樹ハ其葉ヲ賣ルトモ或ハ自カラ蚕ヲ製スルト
モ其賣上リヲ以テ一ト廣ノ收納ヲ得ヘシ又今
年ハ家屋モ少シク廣ウシテ是レ彼レニテ大ニ

安樂ヲ増シ又今年ハ一疋ノ牡牛モ巨大ナル親
牛トナリテ二疋ノ子牛アリ又羊ハ其数ヲ増シ
テ三十疋トナリ一群ヲ為シタリ夫レ米作ノ農
民ハ彼ノ泥濘ナル由^田ノ中ニ身ヲ没シテカ作シ
今此桑茶培養ノ農民ハ其羊ノ毛ヲ剪ミ其蚕ヲ
養フ其情形此ノ如シ其ノ最大ノ幸福ヲ得ルモ
ノハ果シテ孰一ナルヤ彼ノ一方ノ人民ハ蚕ノ
卵ノ喫ルヨリ其ノ場所ヲ設ケテ糸ヲ績キ出ス
マテノ諸変化ヲ見テ心ノ樂甚タ多カルヘク又
子羊ノ戯レテ躍ルヲ看テ其罪ナクシテ功能多

キラ思フトキハ誰レカ憐シク情ヲ起サシラン
又牡牛ヲ見ルニ乳ヲ出スヲ常ニ一桶ニ滿ソ之
ヲ思フトキハ禽獸ナカラモ其勞ニ謝スルノ情
ヲ起コス又眼ヲ轉シテ畑ヲ見レハ物皆嘉ニス
ルニ堪ヘ觀ルニ堪ヘタリシ

今一方ノ米作ノ農民ヲ見ルニ米ノ收納既ニ了
タルノ後ハ農民ソノ泥濘ナル田ノ荒レタルヲ
見テ過去ノ艱難ヲ思ヒ出タシ未來ノ苦辛近キ
ニアルヲ思フノミ是等ノ農民ハ歲月ヲ經ルモ
更ニ繁昌スルヲナク次第ニ墳墓ニ近ワシム

右二種ノ農民ヲ比較スルニ其外形ノ異ナルハ
勿論ニテ其幸福安寧實ニ雲泥ノ違ヒアリト謂
フベキナリ

斯クテ桑茶植付ケノ方ハ早ヤ十年目ニ至リ是
ヨリ收納ハ年々ニ増加スルノミ凡ソ八反ノ地
ハ早ク植付ケラナストキハ十年目ニ至レハ少
ナク反四百弗ノ收納ヲ得ベシ

皆是農民ソノ若年ノトキニ若年ノ妻ト共ニ是
園ニ生活ノ基本ヲ立テシナラハ是頃ニ至テハ
凡ソ三人ノ子アリ惣領八十歳ニシテ凡ソ茶ト

同年ナルベシ而シテ茶ノ生長一即千子ノ教育ノ
資本ヲ立フルタメナレハ茶ノ世話ヲナス子
ヲ養育スルト同様ナルベシ而シテ已レノ身ハ實
ニ獨立ノ姿トナリ若シ中年ニシテ生業ヲ始メ
シ者ナランニハ是頃ハ業ヲ罷テ安穩ニ日ヲ度
ルニ其意ノマ、ナルベシ」上文ハ日本ノ農民ノ
将来ヲ想像シテ其大畧ヲ奉タルモノニシテ固
トヨリ十分ノモノニアラス且ツ産物中之ヲ日
本ニ作りテ其幸福ヲ増シ其財貨ヲ増スモノ甚
タ多シト雖モ之ヲ畧シテ只ツノ實地ヲ模寫シ

タルノミ

上文ノ餘話ニ於テ尤モ注意スヘキ「ハ予カ目
的トスル所第一ニ諸品ヲ雜作スルト米ノ一品
ヲ作ルノ差別ヲ示シ次ニ田ヲ作ル者ト園ヲ作
ル者ト貧富ノ景況ニ差ヒアルヲ論シテ」閱者
之ヲ忘ルベカラズ而シテ上文ニ拠テ考フルトキ
ハ米作ノ農民ノ天ノ時ノ惠ヲ得ルハ六月ニ初
メテ苗ヲ植付ルヨリ十一月ニ之ヲ刈取ルマテ
凡ソ五箇月ノ間ニ留マルナリ然ルニ園ヲ作ル
者ノ天ノ時ノ惠ヲ得ルハ十二月ニシテ園ノ

産出スル所ハ田ノ産生スル所ヨリモ其價大ナルヲ以テ天ノ時ノ恵ヲ得ルニ從テ厚シト謂フベシ且ツ氣候ノ変化常ナキハ大ニ田ニ害アリト雖モ園ハ害ナシ是レ即チ米作ノ國ノ常ニ繁榮ナル能ハサル所以ニシテ政府モ之ニ見アリテ布告ヲ出シテ地ノ産物ニ稅ヲ課スルヲ廢シテ地ニ稅ヲ課スルヲ創メタリ蓋シ如此ノ方法ヲ設ケサレハ歲入ノ恒カナルヲアタハス歲入ノ永久ナルヲアタハス歲入ノ恒アルヲ能ハズ

日本ノ重モナル産物ハ專ラ茶ト絹糸トニ在リ余近頃此國ノ内ヲ旅行通過セシ時屢々人ニ問ハレシ事ハ茶ノ價ハ急ニ下落スルヲ有ルマシキヤトノ問ナリ余常ニ之ニ答ヘテ必ス是レ有ルマシト答ヘタリ今ヨリ九十九年以前ニ余カ國ノ人民僅カニ三百万人ナリキ然ルニ方今ハ大ニ約四千二百万人ニ及ヘリ現今日本ヨリ輸出スル茶ハ大抵皆我邦人ノ貴ク所ナリ我國ハ貨財モ人口モ漸々ニ増加ス可ケレハ日本ヨリ生スル茶ヲハ盡ク必用ナスルナル可シ故ニ此産物

何程生スルトモ速カニ賣レテ有ル可シ日本ノ
絹糸ニ於ケルモ亦然リト謂フ可シ世界皆常ニ
之ヲ要トスルナル可シ此兩産物其價少レハ古
落ス可ケレトモ他ノ産物モ日本ニ於テ尚更ニ
山ニ生ス可ケレハ其ニ準シテ價ノ下落スル迄
ナル可シ故ニ之ヲ産出スル者モ其ニ割合
ル利益ヲ維持スルヲ得可シ

余今閣下ノ注意ヲ請フ一事アリ即チ農人ト為
リタル士族ノ會社ヲ結テ耕作ヲ事トスル者ノ
有様ナリ

ヤマギサワノ平地ニ同協社ト稱スル會社有リ
今ヨリ五年許以前ニ造立セシ農業會社ナリ其
社中ノ者ハ皆下總國佐倉ノ人ニテ原來領主堀
田侯ヨリ一區ノ地ヲ賜ハリ自ラ會社ヲ結テ同
協社ト稱セリ始ノ土地ヲ開拓セシ時ニハ社中
ノ割前一株ニ付キ僅カニ十弗ノ價ナリ爾後荒
蕪ヲ開拓シテ之ニ桑茶ヲ植付ケシヨリ方今ハ
一株ノ價百五十弗程ニ登レリ

舊家老二人重立タル藩士二十二人此會社ノ起
立人ナリ其初ノハ會社所有ノ財産僅カニ二百

四十弗ノ價ナリシカ^方今ハ既ニ七万二千弗ノ位
ニ至シ

社員方今ハ四百八十人有り皆作業ニ從事ス
來迄ハ唯刀劍ヲ使ヒシ手今ハ重大ノ鋤鍬ヲモ
シリ八十人ヲ一組トシテ六組ニ分カテリ每人
一時五ケ日ノ作業ヲ為スリテ後他人又之ニ
代リ常ニ八十人ツ、作場ニ居ル様ニ割付有リ
此輩廣大ノ地面ニ桑茶ヲ植付ケ且此同法ヲ以
テ更ニ多クノ地面ヲ開墾シ行カント準備セリ
此桑茶盛熟ニ及フニ隨テ會社ノ株式モ其價漸

クニ登ル可シ今此貴人等器械ノ助ケヲ借ラヌ
シテ勞作シ初メ着手ノ前ニハ僅カニ二百四十
弗ノ價ニ直セシ土地ニ既ニ七万二千弗ノ價値
ヲ得シハ其功亦偉ナリト謂フ可シ故ニ此會社
ハ政府ヨリ特殊ノ承認ヲ得可キ者ナリ
是等ノ諸事業何程利益ナリトモ亦更ニ要緊ナ
ル一議有り原來四百八十人ノ士族其内多半
家祿ヲ奉還シ自ラ好シテ農人ト為リシ者ナリ
ハ是レ全國士族ノ能キ手本ト為レリ余日本國
中ヲ通過シテ屢々士族ノ者ニ接シタルヲ多ケレ

ハ自ラ思フニ頗ル其西業ノ事情ヲ知レリト信
ス政府ニ於テ彼等ヲ處置スル寛仁ノ良策ヲ施
行スルナラハ國民中ノ知識アル此種族ヲ變シ
テ農者ト為スト難カラサル可シ必ス余カ此ニ
報ニ記セシカ如キ良農ト為ル可キナリ然レト
モ農業器械家畜獸等ノ供給ヲ要シ農業法ノ教
示ヲ要ス此輩ハ猶荒野ノ地ニ新住セシ者ニシ
テ後來豪農トモ為リ國ノ財力産物ヲモ限リ無
ク増加ス可キ望有ル者ナリ
此事ニ就テ財計ノ景況ニ説キ及ホス事ハ姑ラ

ク置クト雖トモ俸祿ニ生活スル人々ヲ變シテ
産物ヲ生出スル者ト為スノ利益ハ顯然ニシテ
隠昧スルヲ得ス

此紙面既ニ十分ノ冗長ニ至ラズトセハ余今些
ノ報告ヲ呈シ且新規ノ農者若シ農業ノ器械ヲ
得又地ヲ耕スノカトシテ馬ヲ用ヒハ如何カ成
立シ得ルノ理ヲ云フ可シ馬有レハ今四人ニ
為ス程ノ作業ヲ一人ニテ為スヲ得可シ是馬
四人ノ勤カニ等シキ者ト見做セハナリ人ヲ用
フルト馬牛ヲ用フルトノ差無ク云ヘハ馬牛ハ

作業シテ唯其勞作ニ費セル食料ノ報ヲ得ルノ
ミ然ルニ工人ハ其食物ノ外ニ貨錢ヲ望ム故ニ
人ニハ些ノ利銀ヲ與ヘサルヲ得ス然ルニ馬牛
ニハ粗糲ノ食料ヲ與フレハ足レリ
世ニ云フ天下人類ノ眞實ノ職務ハ工學家ノ役
目ニ在リ眞實ノ勞力ハ心智ノ勞ニ在リト云ヘ
リ故ニ獸類及ヒ事物ノ力ニ依テ更ニ善ク更ニ
易ク成レ得可キ事ヲ人自ラ為スハ是レ其力ヲ
空レク失フ者ナリ若シ國民ノ必要トスル丈ケ
ヨリ外ニ餘剩ノ物無クハ國皮シテ富ムヲ得可

カラス人カハ若シ他ノ力ニ依テ助ケラレサレ
ハ唯格別ニ天助有ル地味氣候ノ處ニ於ケル外
ハ多ク此富ヲ得ル能ハス國ノ富ハ唯勞作ヨリ
生スル餘剩ノミ物ヲ生スルノ力ヲ増加セシメ
ハ其割合ニ國ノ富モ隨テ増加ス可シ
荒野ノ地ヲ住居開拓スルノ外ニ内國ノ進善モ
亦政府ノ注意ス可キ所ナリ利根川ハ此國ノ最
モ要緊ナル河流ニシテ兩傍ノ膏腴ナル平地
悪水ヲ疏通ス又三年毎ニ其堤防ヲ浚シテ溢レ
出テ人命ヲ害シ財産ヲ損スルト其數夥シク之

カ為メニ沃饒ノ稻田モ時々洪水ノ害ヲ蒙ルヲ
常トシ農者ハ三年毎ニ其産ヲ失フコトヲ期セリ
恰モ苛刺ノ厚税ヲ聚歛セラル、ト一般ナリ若
シ此常額ノ租税ヲ課スルナラハ此沃饒ナルニ
野モ處ニ依リテハ別ニ些少ノ税額ヲ課スルコ
無クトモ或ハ耕作スル者絶エルニ至ラン此説
ハ津田氏ノ此河流ノ傍ニ住ム人ト會話セシ時
聞タリトテ同氏ノ余ニ話セシ者ナリ
此害ヲ救フノ策ハ印幡沼ヲ疏通スルニ在ル可
シ余聞ク此沼ノ水ヲ防クノ堤利根川ノ流レ道

ニ當ルカ故ニ此河流ヲ妨碍シ其レカ為メニ斯
ノ妨ケラレタル河水堤防ヲ及シテ横溢スト云
フ印幡沼ハ長ナ七里横幅一里有リ若シ舊河道
ノ檢見川ニ流出スル者ヲ浚通スルコト能ハサル
ナラハ別ニ本田橋川ニ通スル河道ヲ疏通セハ
其成功亦難カラサル可シ
此沼ヲ疏通スルニ依テ沃饒ノ土地大約十万余
許稻田ト為ルヲ得可シ是ノミニテモ既ニ大ニ
ル開拓ト為ル可シ斯ク良善ナル法ノ布令有ラ
ハ公私ノ大利益タル可シ且利根川ノ洪水横溢

24

ヲ弭ムルカ故ニ此土地復ニ耕作ノ便ヲ得テ十
分ノ租税ヲ出スニ至ル可シ余聞ノ印幡沼ノ水
面江戸ノ入海ヨリ高キト三十尺ナリト此事ハ
真偽ヲ確定センヲ欲セハ唯一人ノ工学家ヲ用
ヒハ即チ足ル可シ此事總体ノ繁昌ニ關シテ大
緊要ノ作事ナレハ余真誠ニ政府ノ爰ニ注意セ
ンコトヲ請フナリ且又利根川ノ船路通行ニ僅少
ノ費用ヲ掛ケテ大ニ進善スルヲ得可シト思ハ
ル斯クノ如クナレハ商業ノ便利ヲ為シ運漕ノ
費ヲ寡フス是故ニ今日本ニ於テ第一喫緊ノ要

件ナル道路ノ議ニ及フナリ古昔ヨリ凡ソ何レノ
國ニテモ自國內ノ商業ノ迅速ニ流通シ得可キ
必要ノ通路無クハ没シテ進歩繁榮スルヲ得ス
トハ格言トシテ定メラレタル者ナリ良善ノ大
道ノ至要ナルヲ知ラント欲セハ國內交易ノ割
合ヲ以テ外國交易ノ割合ト比較シ見ヨ昨年此
國ニテ外國交易ノ總高大約三千五百万弗ニ登
リ此一年ノ間國內ニテ行ハレタル商業ノ總
高ハ必ス六億五千万弗ニ過タルナル可シ且國
内ノ交易ハ作業ヲ派分シ隨テ產生ヲ増加スル

ニ至ルカ故ニ其利益殊ニ多キヲ知ル可シ此廣
大ナル商業ハ村郷ト都府トノ間ニ行ハル者
ナリ
良善ノ道路迅速ノ通行ハ運送ノ費用ヲ寡クス
農夫ノ手ニ成ル産物ハ概シテ出^カ高キ者ナルカ
故ニ税重キトキハ農夫最モ其害ヲ受ク今夫^レ東
京ヨリ一里内ノ地ニ産スル穀モ五十里外ノ地
ニ産スル穀モ其農夫ノ手ニ入ル金額ハ同様ニ
ノ五十里外ニ産スル穀ハ培養及運輸ノ費ヲ拂
ヒ而シテ後農夫通常ノ利ヲ収メサル可カラス然

ルニ道路ヲ修シ水利ヲ通シテ往来ヲ便ニスル
時ハ右ニモ言ヘル如ク運輸ノ費ヲ減シ隨テ
農夫ノ収入ヲ多クスヘキナリ是レ決シテ例ヲ
挙ケ証ヲ引キテ歎々スルヲ待タス經テ經濟ノ
理ヲ論スル書中ニハ比々トメ載スル所ナリ
又此結文ニ至テ竊カニ閣下ニ啓セント欲スル
貴國ノ急務数件アリ今之ヲ左ニ陳列ス
其一荒地開拓ノ事○此等ノ荒地ハ一々測量ヲ
遂ケ且ツ容易ニ之ヲ偶数ニ分ツヘキ區劃法ヲ
定ムヘシ又其區劃ハ小ニ過ク奇カラス區劃小

30

ニ過クレハ耕作ノ時馬ヲ用フル能ハス牧場ト
為ス時數頭ノ牛ヲ放ツト能ハス極メテ不便ナ
リ統テ官地法制ノ立テ方ハ大イニ他日ノ盛衰
ニ関スル丁ナリ

其二目今國內ノ缺ヲ充タスニ足ルホド羊種ヲ
購入スル丁

其三國內用ニ供スル丈ケノシユガルビート菜
糖ノ其根ヲ用テ砂ヲ植附クル丁〇方今輸入スル
所ノ砂糖年々二百二十万五千ドルニ値ス然
ルニ日本ノ地ハ大イニビートニ適シ殊ニ此末

開ノ地ハ最モ妙ニメ其種子ノ播スル時候ニ於
テハ曾テ肥糞ヲ要セス普魯士ニ於テハ迄頃頻
リニビートヲ植付ケ年々政府ニ収ムル所ノ税
凡ソ八百万ドルニ及ヘリ是レ其根ノ目方百ポ
ンドコトニ十七セントヲ課シテ得ル所ナリ
従来下總ノ國ニ於テハ盛ニ蕃薯ヲ作レ凡其益
極メテ薄シ今之ニ代ヘテ少シクビートヲ作ラ
ハ得ル所必ス厚カラシム但此ノ如クスル片ハ蕃
薯ノ價騰貴セン丁ヲ言フ者アルヘシト虽モ砂
糖ノ價隨テ下落スル時ハ自カラ全國ノ益ニメ

以テ其損ヲ償フヘシ是レ日本ノ益ニメ年々日
本ニ輸入スル所ノ砂糖十分ノ一ハ支那ヨリ来
ルヲ以テ支那ノ益ニハ非ス日本此益ヲ蓄積シ
テ他ノ事業ヲ励マスノ用ニ充ツヘキナリ
其四外國ノ牛種ヲ輸入シ内地ノ牛ト交ラシメ
テ内地ノ牛種ヲ進マシムヘキ事○東京及横濱
ニ於テ毎月屠殺シテ食用ニ充ツレ所ノ牛種大
凡八百頭ニ下ラス其一頭ノ重サ平均三百二十
五ポントトスル時ノ全量凡ソ二十六万ポンド
ニメ其中三分ノ一ハ必ラス内人ノ費ヤス所ナ

リ且ツ内地ノ人ハ其古来ノ言ヒ傳ヘ又ハ其佛
ヲ奉スル等ノ故ヲ以テ從來動物ヲ殺スルヲ忌
ミタレ厄迄来稍開ケタル人ハ復タ此等ノ説ニ
拘セス況ンヤ動物ハ皆人ノ為メニ殺サルハ
其天賦ニメ其性老後ノ食ヲ貯蓄スルヲ能ハス
人之ヲ殺サレハ遂ニ自カラ餓死スヘキ者ナ
リ然ルニ内地ノ人日ヲ逐フテ此真理ヲ悟トル
ノ勢アレハ肉食ノ日々ニ盛ナラン丁期シテ待
ツヘシ而メ余ノ聞ク所ヲ以テスレハ此ノ如ク
牛ヲ屠フルノ日々ニ多キヨリ内地ノ牛種漸マク

乏シキニ至ルト云テ然ルニ内地ノ牛ヲメ外國
ノ種ト交ラシムレハ其生子必ラス大ヲ増スヘ
シ方今日本ノ牛ハ平均三百二十五ポンドニ過
キサレ凡此交合ニ依テ得タル牛種ハ必ラス五
百ポンドニ至ルヘク又更ニ屢々交ラシムレハ尚
其巨大ニ至ラン丁疑ナシ且ツ大牛ヲ飼フノ費
ハ其小牛ヲ飼フト大イニ加ハル丁ナクシテ其
益ニ至テハ大抵四百ポンドノ牛ト六百ポンド
ノ牛ト恰カモ其量ニ比例シテ價ヲ異ニスヘシ
又是ノミナラス其皮ヲ用ヒテ韋^{ナシカハ}ヲ造ルノ益ア

リ目今牛皮及沓類馬具等ノ輸入ヲ算スレハ殆
ント百万ドルニ近シ又右言ノ所ニハ牛乳牛酪
及乾酪等ハ算入セサレ凡是レ又多少ノ益アル
ヘキ者ナリ

又横濱東京ノ兩所ニ於テ屠アル所ノ羊ハ皆支
那ヨリ輸スル者ナレ凡日本ニ於テ此至貴至要
ナル動物ノ数百万ヲ牧スル丁難カラス

其五内地土功ノ事○内地修繕ノ已ム可カラサ
ル者ナル丁ニ就テハ貴國ノ久シク交リヲ修シ
タル和蘭ヲ以テ例トスルヨリ善キハナシ旧史
ニ拠テ之ヲ考フルニ此國原トハ渺漠タル沼澤
ニメ独リ軟泥ノ丘阜又ハ巨大ノ樹林ノミ汚水
ノ間ニ星布シ其地多クハ海面ヨリ低キタシテ
河川ノ漲溢海潮ノ浸入絶ユル時ナカリシカ此
國ハ人ノ能ク知ル所ナレハ其海ヨリ奪ヒ取り
タル豊饒ナル土地ノ形状ハ余ノ記載ヲ要セス
曩キニ大洋ノ侵入ヲ防キタル者ノ子孫方今大

イドル海ヲ乾涸セント企ツ此工事ハ成功ニ至
ルマテニハ許多ノ歳片ト数百万弗ノ費用ヲ要
ス可シ一ノ有名ナル佛國政事家(余スルリー氏
ナリト信ス)ノ言ニ従前一葉ノ草ヲ生セシ地ニ
兩葉ノ草ヲ生セシハル者ハ人類ノ惠人ナリト
然ル時ハ不毛ノ濕地ヲ變シテ豊饒ノ田野ト為
ス人ヲハ何ト着做スヘキヤ印旛沼乾涸ニ屬ス
ル些小ノ費用ト工事トニ因テ得ヘキ富ヲ論セ
ン沼ヲ乾涸スレハ豊饒ナル稻田凡ソ十万反ヲ
得可シ沼ノ畔ニ在ル稻田ノ價ハ每一反六十ニ

弗五十セントナリ右ノ價トスレハ日本帝國ハ
六十二万五千弗ノ富ヲ得可シ沼ノ乾涸ヨリ利
根川ノ谷ニ應驗ヲ生スル了ハ上ニ述ヘタリ若
シニシノハラオワチマクツカノ平地モ田地ト
為リシナラハ大藏省ニ年々九十万弗ノ歳入ヲ
増ス可キ了モ亦既ニ論シタリ

道路ノ悪シキニ因リ此地ノ産物ヲ運送スル費
用多ク大イニ産物ノ價ヲ騰貴セシメサル了能
ハス一人ノカハ平坦ノ道路ニ於テ二百ポンド
ノ重サヲ一時間ニ英ノ一マイル運送スル了ヲ

得一馬ノカハ同時間ニ一千八百ポンドノ重サ
ヲ運送スル了ヲ得即チ九人ノカヲ合セタルニ均
シキモノト算ス荷物ヲ載セタル車ヲ牽ク馬ト
荷物ヲ負駄シタル馬トハ人ト馬トノ間如ク
比例ナリ但其差ハ人ト馬トノ如ク大イナラス
若シ良キ道路ヲ造リタラハ現今荷物ヲ擔テ運
送スルヲ業トスル者ノ殆ント十分ノ九ト馬ノ
背ニ負駄シテ運送スルノ勞ヲ省キ九名ノ人ニ
有用有利ノ職業ヲ與フルヲ得可シ假ニ東京ヨ
リ五里日本隔リタル處ニ十口ノ小村アリテ各

東京ニ産物ヲ駄送スル為メ一匹ノ馬ヲ有テリ
ト看做セハ十人ノ農ヲ各一馬ヲ所持シ之ニ産
物ヲ駄シ各馬ヲ牽テ家ヲ去リ東京ニ往返スル
為メ必ラス一日ヲ費ヤス若シ其中ノ一人一輛
ノ荷車ト二匹ノ馬ヲ所持セハ十人ニテ運送シ
タル産物ヲ一人ニテ運送シ時間ヲ費ヤス丁亦
少ナシ儲九人ノ者荷車ヲ所持スル者ニ對シテ
汝我輩ノ産物ヲ運送セハ我輩汝ノ為メニ各一
時間汝ノ田地ヲ耕ス可シト言フ可シ即チ九時
間ノ勞ヲ以テ荷車ヲ所持スル者ノ東京ニ往返

スル時間ヲ償フ或ハ九人ノ者九時ヨリモ稍多
ク労働スルモ猶大イナル所得アリ之ニ依テ九
人ト八馬ノ勞ヲ省キ他ノ利益アル事ニ用フル
ヲ得ル丁知ル可シ蓋シ是等ノ人ハ各一週ニ一
度若クハ一月ニ四度東京ニ行ク丁ヲ要ス可シ
然レハ荷車ヲ用フルカ為メ毎毎週ノ六日ノ
所得アリ此ノ如キ計算ハ之ヲ擴張シテ廣ク全
國ニ及ホス可クシテ其廣大ナル丁ト大イニ勞
働ヲ省クカ為メ生スル利益忽チ廿ニ頭ハル可
シ方今佛國ノ大イニ繁栄ナルハナボレオノ

就シ及ヒ就サント企テタレ國內改正ノ工事ニ
由ル丁甚タ大イナリナポレオンハ大将ノ地位
ニ在テ能ク人ノ價值ヲ知リ一毫モ其身体ノ力
ヲ無用ニ費ヤサス國君ノ地位ニ在テモ人ヲ有
益ノ事ニ供スル同一ノ大理ヲ認メタリ政事家
ハ一國ノ大将ト少シモ異ナル所無シ若シ一國
ノ大将陣中ニ多ク懶惰ノ者アラシ兵卒ノ糧
食ヲ運輸スル者過多ニシテ其他ニモ無用ニ使
役セラル、者多キ時ハ隨テ有用ノ兵員ヲ減ス
一國人民ニ付テ論スルモ亦之ニ同シ西洋諸國

ニ於テハ良キ道路ヲ必要ノ第一ト為シ秘魯ハ
人口總カニ三百万ニ過キサレ氏道路築造ニ一
億弗餘ヲ費ヤシタリ道路築造ハ產物運送ノ費
ヲ減シ僻遠ノ人民ヲシテ產物ヲ市ニ出スノ便
利ヲ得セシムルノ外人口稠密ノ地ニ於テ衣食
ノ價ヲ減ス蓋シ是マテ產物ヲ市ニ出スヲ得
サリシ人民新タニ運輸ノ便利ヲ得レハナリ下
野ノ大田原近傍ニテハ東京ニテ十弗若クハ十
二弗ノ價アル大イナル松本ニ金一分ニテ買フ
トヲ得木炭其他大田原邊ニテ東京へ送ル

得ル物品ハ皆然リ其他國內ノ通路益便ヲ得レ
ハ夫レニ隨テ帝國益固シ而ノ通路ヲ便ニスル
ニハ道路ヲ修繕シ鐵道ヲ建築スルヨリ勝ル
ナシ然リ而メ先ツ道路ヲ修メ然ル後チニ鐵道
ヲ建ツ可シ道路通スレハ之レカ為メニ往來便
ヲ得往來便ヲ得レハ乃チ金銀貸借ノ便ヲ得金
銀貸借ノ便ヲ得レハ其利足低クナル今迄貸借
ノ利足ノ高キハ道路通ヤス往來ノ便ヲ失スル
ニ由レルナリ

第六 製造

輸入諸織物ノ中チ毛織物ノ價ト而已ニテ五百
万弗ニ越ユ之レ國人之ヲ製造スルノ本質器械
ナク且ツ其術ヲ知ラザルヲ以テ斯クノ如キ大
ナル國益ヲ失ス故ニ之ヲ國內ニテ製造ヤス
バアラス之ヲ製造ヤスニハ本質ヲ國內ニテ得
ルヲ專一トス而メ國內ニテ之ヲ得レハ之レカ
為メニ自然道路通ヤス其故ハ道路通ヤサレハ自
然路程遠シ路程遠ケレハ利ヲ得ルコト少ケレハ
ナリ

昨年予永ク日本ニ往シ且ツ以製造事務ニ廣ク

通セルヲ以テ日本ニテ羊ヲ畜養スル事ニ付キ
テ予ノ見込ヲ採用アルノ譽ヲ得タリ由テ更ニ
左ノ如クアラン予ニ於テ少シモ疑フナシ
羊ヲ畜養スル善法ヲ得且當國ノ牧草氣候ニ適
セル種類ヲ買ヒ入レテハ數年ニシテ日本本質
ヲ得テ斯クノ如キ有用ノ産業ヲ起スヲ得可シ
而シテ之ヲ盛大ナラシメンニハ畜養スル者ト
製造者同心協力シテ事ヲナサズンハアラス而
ノ双方共ニ同心協力シテ事ヲナセハ双方共利
ヲ得ルト益大ナリ而メ若シ日本ニテ國産ノ用

法ヲ得テ國民ノ業ヲ進メテハ國ノ富強ニナラ
ザランヲ欲スト虽得ス且若シ日本ニテ其天命
ヲ解シ國民ノ富強ヲ欲スルニ隨テ此業ヲ興シ
テハ此地ノ氣候宜シキニ適シ地面膏腴ニテ地
ノ利ヲ得ルト疑ヒナシ然ル時ハ日本執政家日
ナラスンテ西土ノ人民ノ意見ニ倣ヘル教ヲ受
ケタル人民ヲ支配スルニ至ル可シ之レ他ナシ
人民ハ教ニ從テ變化ス故ニ才智ヲ培養スレハ
見識定マリ謀ル所高ク志意ハニナリ孤陋ノ心
日ニ消ス日本モ亦斯クマラント必セリ

此大事業ヲ興シ後采ノ者、為メニ有用ノ道ヲ
開キ幸福ヲ受ケシム可シ然リ而メ富強ヲ得ル
ノ基礎タルモノハ人民ト土地トナリ日本ニ大
基礎アリ而メ之ヲ用ユルノ道ヲ得サルヲ以ノ
故ニ凡百ノ事進歩マス富ヲ増サス開化進ムニ
隨テ要スル物ヲ得ス之レ等ノ事ヲ反復熟思ア
リテ當今ノ執政家ニ國民ノ望ヲ起スヲ預メ知
ラシメ且國民後來必ラス懇望マシテ現今ニ
解明ナシ給フ可シ頓首謹言

シヨクニ

日本東京千八百七十五年第一月二十三日

大藏卿大隈重信閣下ニ呈ス

